
あいのうた

月久麻子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいのうた

【Zコード】

Z2540D

【作者名】

月久麻子

【あらすじ】

今日は、私の結婚式の日でした。とてもとても、涙がこぼれてしまふくらい、すてきな日でした。父も母も兄も妹たちも、とても幸せそうに笑っていてくれて、それを見ているだけで私も幸せになってしまふくらいでした。真っ白な純白のウエディングドレスに身を包み、会場に入るとそこには親戚や家族や、昔からの友人たちがみんな満面の笑顔を浮かべて私を迎えてくれました。たった一人の、とても大事な一人の笑顔をのぞいては。一週間前、私の妹が死にました。交通事故でした。

今日は、私の結婚式の日でした。

とてもとても、涙がこぼれてしまうくらい、すてきな日でした。父も母も兄も妹たちも、とても幸せそうに笑つてくれて、それを見ているだけで私も幸せになつてしまふくらいでした。

真っ白な純白のウェディングドレスに身を包み、会場に入るとそこには親戚や家族や、昔からの友人たちがみんな満面の笑顔を浮かべて私を迎えてくれました。

たつた一人の、とても大事な一人の笑顔をのぞいては。

一週間前、私の妹が死にました。交通事故でした。彼女は私の式をとても楽しみにしてくれていて、お願いをしたら、困った顔をしながらも私の式で歌を歌つてくれると約束をしてくれていました。とても恥ずかしがりやだつたのです。

私には妹が三人居て、三人で歌を歌つてくれると約束をしてくれたのです。

「何を歌うかは、当日まで秘密ね。」

そう言って微笑んだ彼女の顔が、今も私の記憶の中に浮かびます。彼女の死は唐突でした。想像もしていませんでした。

きっと私もいつか、妹の式に出て、恥ずかしいのを堪えて歌つてあげようと考えていたからです。

彼女の未来は唐突に途切れてしまつたのです。

病院に駆けつけたとき、まだ妹の意識はあつて、私は涙を堪えて妹の手を握りました。

「式、もう少しだね。私、歌うからね。」

微笑んでいました。私は必死に頷いて、

「歌わなかつたら、承知しないからね！」

強がりで、笑いました。妹も笑つて

「何を歌うかは、本当に、秘密だから楽しみにしてね。」

弱々しい声でした。

私は看護婦をしています。多くの、たくさんの方たちが亡くなつてきましたのを見てきました。

だから、分かつてしまつたのです。

私の妹は、もうじき死んでしまうということが。

何もしてあげられないことが、こんなにも悔しくて歯がゆい」とだけは知りませんでした。

今でも、患者さんが亡くなつて、泣いたことがあります。それで

それまでとは比べ物にならないくらいの悲しみと絶望でした。

私は、妹が死んでしまう、ということが分かつてしまつのです。手を握り締めて、必死に祈りました。家族が全員集まつてきて、必死に名前を呼んでいます。でも、少しずつ妹の反応がなくなつてくるのです。

一時間後、妹は息を引き取りました。

亡くなる直前に、彼女が言いました。

「お式をしてね。私、歌うから。ちゃんと、聞いてね。みきちゃん、よりちゃん、何を歌うか、言っちゃ駄目だよ。」

そう言い残して、まだ二十七歳だった私の妹は、息を引き取りました。

泣き叫びました。どうして私の妹が死ななくてはならないのか分からりませんでした。

そこに居た、私の家族は全員が号泣していました。

父も母もぼろぼろと涙を零しています。妹たちも大泣きをしていました。兄は、遠くに住んでるのでこの場には居ません。来れませんでした。きっと、たどり着いたとき涙を流すでしょう。

最期の妹の言葉が、私の中に渦巻いていました。

「お父さん、お母さん、私、式を挙げたい。いい？」

式は一週間後です。普通は、しません。けれど式を挙げてと、妹が言つたのです。最期の願いです。私はどうしても叶えてあげたかったです。

二人は顔を見合させて、少し考えて、そして頷いてくれました。悲しみをこらえて、私は式を挙げることを決めました。夫になる人もその場に居てくれて、同意をするかのように強く私の手を握り締めてくれました。

何を言われてもいいと、心に固く決意をしました。

妹が亡くなっているのに、自分の幸せだけを望む愚かな姉だと思われてもいいと思いました。どうだつていいのです、他の人にどう思われようと。

眞実は、私と家族の中にだけあればいいのです。

私は、妹の最期の願いを叶えてあげる。

私にしか、それは出来ないです。
悲しむことは誰にでも出来る、けれど、それを出来るのは私だけなのです。

「みきちゃん、よりちゃん、何を歌うかは式まで言っちゃ駄目だよ。

泣きはらした真っ赤な顔をした妹たちは、こくりと小さく頷きました。
それを見届けてから、もう一度だけ私は涙を零しました。

式の日はとても晴れていました。良かつたねと、みんなで笑いあいました。

みんなの目が真っ赤に充血しているのはきっと、亡くなつた妹を昨日の夜、思い出して泣いたからだと思います。
妹の写真は、布に包んで母が胸に抱いています。

式の人数変更はしませんでした。

私の妹たちは全員、この会場にいるからです。

式の準備をする為に、家族と別れ、私は控え室に行きました。ドレスの前写しに付き合つてくれた亡くなつた妹がとても綺麗だと書いてくれたドレスに身を包み、その時をじつと待ちます。

午後十一時、式が始まりました。

挨拶があつて、お祝いの言葉があつて、食事をして、お色直しをして、またお祝いの言葉がありました。

着々と式は進んでいきます。

そして、歌の番になりました。

二人になつてしまつた妹たちが、布に包まれた大きな四角いものを持つて、マイクの前に立ちます。

私の妹が、三人居る、ということを知つてゐる友達が「あれ?」と いう顔をしています。

私は、すつと立ち上がりました。

「一週間前、妹のえみが亡くなりました。交通事故でした。」

ざわつと会場が揺らめきます。それでも私は続けました。

「本来ならば、この時期に式をするなんて、と思われてゐる方もいらっしゃると思います。けれど、えみが、亡くなる直前まで、私に式を挙げて欲しいと言つたのです。これから妹たちが歌う歌は、本来ならえみも歌うはずでした。彼女は、とても私の式を楽しみにしててくれていました。私が、幸せになることをとても喜んでくれっていました。だから、恥ずかしがりなのに、ここで歌うことを承諾してくれていました。けれど、一週間前、交通事故で亡くなつたのです。その亡くなる直前まで、式をして欲しいと、自分が歌うから、と最期まで言つっていました。私は、妹の最期の願いをどうしても叶えたかったのです。」

みきの方に視線をやると、頷いてみきは大きな四角いものから布を取り去りました。

えみの遺影がそこに、ありました。

「妹たちが何を歌つか、私は知りません。えみが、最期まで内緒だと言つていたからです。私はとても楽しみにしていました。歌つてくれることが純粹に嬉しいのです。」

堪えていた涙がひとしづく、落ちてしましました。

「今から、私の妹たち三人が歌つてくれます。」

二人ではないのです、いつまでも私の妹は、三人。これは変えられない事実でした。

そして、少ししてからあたたかな拍手が沸き起きました。涙を拭つて、礼をして、私は席に着きました。同時に伴奏が始まります。

聞き覚えのある曲で、それを聞いて私は、つい笑つてしましました。それは、妹がとても好きだつた女性アーティストの曲だつたのです。妹は、その人がとてもとても好きだつたのです。

妹たちが歌いだします。

そこに私は、亡くなつたえみも一緒に居るのだと、見ていました。歌声は途中から、涙声になつてしまつていきました。それでも必死に歌つている妹たちが、とても愛おしくてたまりません。

その時、あれと思いました。

涙声の歌に混じつて、きちんと歌つている、三人目の声が聞こえたのです。私は耳を疑いました。みきとよりは顔をぐしゃぐしゃにして、泣いて、私を見てきます。

もうそれはほとんど歌になつていませんでした。それでも、ちゃんと、誰かが歌つているのです。

その声は聞いたことがあります。

間違えるはずがありません。二十七年間聞き続けた声だつたのです。

「・・・・えみ・・・?」

その名を呼んだとき、不思議なことが起こりました。

ほんやりとですが、みきとよりの間に、えみが立つているのです。三人で選びに行つたという、濃紺に纖細な星柄のシックなドレスを着て、綺麗に髪を整え、丁寧な化粧をした、きっとえみが生きてい

たらそのいでたちでいたであらひ、その姿で。
ぶわ、と涙が溢れました。

えみの最後の言葉を思い出しました。

「お式をしてね。私、歌つから。」

えみも、約束を守つてくれたのだと、気づきました。
微笑みながら、大好きだった人の歌を高々に歌い上げるえみは、ま
るで生きているかのように。

二人の妹を支えるように腰に手を回し、促すように綺麗な声で、歌
っています。

視界はぼやけて、まともに見えません。それが嫌で私は何度も瞬き
をしました。

そつと手に手を重ねられて、夫になつた彼も、涙を浮かべて「いるこ
とに気づきました。

ああ、えみの姿はこの会場にいる全員の目に映つているのだと。全
ての人に、えみの姿と歌声が届いているのだと、気づきました。
こんな奇跡が、あるなんて信じられませんでした。

天国から、妹が、約束を守つて歌いに来てくれたなんて信じられな
くて、でも信じられないくらいに嬉しくて、嬉しくて。

「えみ」

零れるように、名を呼びました。

気づいた風に、えみがこちらを見て、微笑みかけてくれました。

その笑顔は、約束を守つたよと、とても誇らしげでした。

クライマックスに近づくにつれて、ますます高々となつていく歌を、
妹たちが歌っています。

今、この時が、永遠に続いてほしいと、願いました。

えみが、そこに居るということを、手放したくなかったのです。
けれど無常にも、その曲は終わりを迎えてします。
最後の伴奏が流れます。

「りえちゃん、大好きだよ。必ず、幸せになつてね。」

えみが言いました。

私はもう、溢れる涙が止められませんでした。何度も何度も頷いて、
重ねられた彼の手を強く握り締めました。
そして。

伴奏が終わると同時に、えみの姿はすうっと、消えていました。
「絶対に、幸せになるからね。」
えみに向かつて言いました。

今日は、私の結婚式の日でした。

とてもとても、涙がこぼれてしまふくらい、すてきな日でした。
父も母も兄も妹たちも、とても幸せそうに笑っていてくれて、それ
を見ているだけで私も幸せになつてしまふくらいでした。
きっと私はこの日を、一生涯、忘れる事はないでしょう。
最愛の妹がくれた、最期の約束とプレゼントを、絶対に忘れないで
しょう。

とても、とても幸せで、すてきな日でした。

「ねえ、あいくん。」

「何? りえ。」

「子供が出来て、その子が女の子だつたらえみつて名前、付けてい
い?」

「男の子だつたらどうするの。」

うーん、少し悩んでからにかつと笑いました。

「その時は、えみおね！」

「なんだよそれ。」

私たちの笑い声が、青い空に吸い込まれていきました。
高く高く、どこまでも青い空。すばらしい秋晴れの日。
とても、素敵な、幸せな、一日でした。

(後書き)

読んでくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2540d/>

あいのうた

2011年1月11日02時15分発行